四月斗争にむけて ― 大学・安保・沖縄

法学部斗争委員会 4/10

南ベトナム民族解放戦線の テト休戦明け攻勢（2月23日未明から開始された）は、米軍のスポークスマンでさえも否定しきれないほどの多大な人的・物的損害を米軍・政府軍に与え、今なお続けられている。この攻勢は、数時間ばかりの「和平」会談に水をさし、ワシントンとカイライ政府を更なる政治的・軍事的敗退においやる一方、解放戦線の強力を示威した。

しかし、この事実を、米軍による絨りく、破壊活動のディスクレーションを意味するものではなく、むしろ窮地においこまれた彼らの一方の残虐な軍事行動を招来している。昨年以来の全国学園斗争の高揚の中において、ベトナムはやくもにさらされなかったのだが、しかしその間にも侵略戦争が続けられていたことを忘れてはならない。

▷ 我々にとって、ベトナムとは何か……

我々は、ベトナム戦争に反対する――それが有害なき侵略戦争であるという意味において。

我々は、幾多の反戦運動を展開してきた。それにもかかわらず、政府・自民党は、北爆を全面的に支持し、それのみか、日本の基地からベトナムへ出撃する爆撃機や潜水艦さへも容認している。日本で作ったナパーム弾が日本人の遺族するしらせで運ばれ、血められた米第七艦隊が日本へ寄港し、負傷兵が野戦病院へ運ばれてくる事実をみるとき、日本は参戦国でなくて何であろう。「ベトナム人民支援」などと口先きで云う前に、我々一人一人が加害者の立場にあるのだ、ということを痛みをもって考えねばならない。

▷ ベトナム戦争と全世界スチューデント・パワー

アメリカの学園斗争はベトナム反戦運動を契機とする。勿論、徴兵拒否運動がもつ重要性は否定できないが、しかし、より本質的には、自分たちの大学やそこで行う研究が何らかの形でベトナム戦争に関係している、という認識であった。一科学者の良心の有無にかかわらず、結果的に彼の研究の成果が戦争に利用されている、ということがわかった時、学生・科学者の反戦運動は、単なる市民運動の次元から、総体としての科学・学問ひいては大学を問い直すラディカルな運動へと転換した。そして、それは、ドイツ・フランス・イギリス・日本等においても多かれ少なかれ云える。

▷ 科学の今日的意味

戦後日本の科学にたいする支配的な考え方は、「戦争のない学問」[illegible]故に、進歩的科学者たちの科学運動は、「科学の民主化」[illegible]しかし、その運動は、日本学術会議の動向をみればはっきりわかることだが、[illegible]っている。「革新勢力」はそれにつりあう[illegible]政府・独占の御用に対する[illegible]明する。しかし、これらは我々の求める道になるべきものではない。[illegible]科学は任意で科学を語る時、とどのつまりは、科学の自主性、科学の政治的中立性[illegible]する事になる。自分が科学者であることに何の疑問もなく、[illegible]科学の進歩は[illegible]と思いつづけ研究を行う。そして、その成果が直接に戦争に利用[illegible]反戦運動をする……こういった科学者の考え方[illegible]せざるをえないのだ。

我々は、科学者総体として、今日的体制とのかかわりあいの中[illegible]、結論的に云うならば、科学は体制化されている、自然科学については、[illegible]技術と直結して、資本主義体制そのものである企業に奉仕している。軍事産業[illegible]一方は